

「サーバント・リーダーを求め時代」

大学名誉教授
東方敬信
TOUBOU Yoshinobu



神に仕える炎のランナー

1924年パリのオリンピックで英国のエリック・リデル選手は、日曜の100メートル走を礼拝出席のために棄権し、7月11日水曜に開催された400メートル走で、精一杯の力を出し切って優勝しました。この爽やかなスポーツマンは「神に仕える」人として「神のサーバント」を証しました。この有名なエピソードは、彼の愛唱聖句「主に望みをおく人は新たな力を得／鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」(イザヤ40:31)と共に記憶されています。これを新制大学五十周年記念の時に紹介して募集し青山学院大学のマスコット「イーゴ」となりました。まさ

社会連帯経済の時代

私は、「キリスト教経済倫理」を教えました。二十世紀末のバブルが弾け様々な不祥事や社会現象が生じた時なので大勢が履修しました。その講義ノートを中心に『神の国と経済倫理』(2001年)という書物も出版しました。経済学の父といわれるアダム・スミスが『道徳哲学』の教師であり、自然神学も教えて利他心を分析したことも指摘し経済倫理へと導入しました。それが「フェアトレード」に触れる機会にもなり、さらに留学して「OEC D」で国際貢献する人も生まれました。また「最後の晩餐」が「相互贈与性」を生み

キリストの体のイメージ

聖餐式は、パンと葡萄酒を分け

出す「連帯の源になる」として地球規模の食糧問題や環境問題も論じました。いまや二十一世紀のグローバリゼーションの時代は、地球規模の課題に取り組まなければなりません。このような時、人々の利己心を強制的に束ねるトマス・ホプスの「リヴァリアサン」(ヨブ記・40:25)のイメージより、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」(ローマ12:15)と使徒パウロが勧めた「キリストの体」のイメージの方が必要でしょう。これが、「サーバント・リーダー」を求め時代と世界の状況です。

のミサで葬儀を行うと宣言し、すべての信仰者は、富者も貧者も一同に会して同じ聖餐にあずかりました。エリートたちは激怒しましたが、ロメロは、断固として司式を続けました。彼は、富者と貧者を分ける空間的仕切りや障碍を壊す聖餐の力を引きだしました。……祭壇を囲む場での天的で普遍的な公同性(Catholic)が地上の瞬間に実現した」と米国の宣教師カヴァナーは報告しました。この報告に加えて、私は青学で今も続いているグローバルな運動「フェアトレード」と「パブリック・アチーブメント」という「草の根の教育運動」の例として、障碍者施設(正揚学園)と長く続いた青学の初等教育の交流をあげます。真のグローバルゼーションは、その「空間」と「時間」の「希望の物語」に導かれます。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣くという「キリストの体」のイメージは、1980年代から論じられた「ソフト・パワー」という文化的影響力として政治的想像力を発揮します。政治学者ジョセフ・ナイは市民社会を動かす力として「ソフト・パワー」を用い始めました。それは経済力や武力を「押し付ける」ハード・パワーではなく、文化や価

値観によって「他者を惹きつける影響力」です。つまり市民社会に生まれる「惹きつける」価値観の影響力あるいは浸透力です。この浸透する影響力は市民社会から政府に流れます。神学者ジョン・コウトニー・マーレイの「公共的達成(パブリック・アチーブメント)」という草の根の教育で市民社会は動くのです。その意味で、「キリストの体」という聖餐共同体は、その「空間」「時間」の物語と小さなジェスチャーで社会を教育・変革します。「サーバント・リーダーシップ」が草の根の教育という小さなジェスチャーで市民社会を変革します。神学者カヴァナーは、教会と市民との最も実りのある対話の方法は、具体的実践つまり「証し」を通しての伝達だとします。例えば、彼の地域の諸教会はCSA(農業支援共同体)を構築します。CSAでは、共同体が農作物の成長する季節の開始時期にシェアを購入して形成されます。その諸教会は、農作業のボランティアにも招かれ、農産物の収益を前もって共有します。実質的善のオータナティブな物語を語る空間を作るCSAでは、共同体が人格的関係、共同責任、農家の生活可能な収入や食料を生じる土地へのス

チュワードシップを発揮します。それは、また成熟した「ホスピタリティ」をもつ「品格の共同体」で「ペン種」(ルカ13:18,19)のような影響力をもちます。私の友人の神学者ハワーワスの後継者ルーク・ブレサートンは、そのような共同体を「質素、忍耐、正直、信頼、思慮分別」という美徳を身に着けた「品格の共同体」だとします。そういえば道徳哲学者アダム・スミスのイメージした市民社会も新自由主義の機械的メカニズムの世界ではなく、人々が他者を思いやる「慎慮」や「正義」や「仁愛」や「自制」という「社会的美徳」を身に着けた「品格ある世界」でした。このように考察するなら前述の「ホスピタリティ」を実践できる「品格の共同体」がこのグローバル時代に必要となります。社会哲学者ホプスのイメージする国民国家の原像「リヴァリアサン」(イザヤ27:1等)は強制力で締め付ける「利己心結集の共同体」で、パンと葡萄酒を分与するキリストの体は「和解とホスピタリティ」で神の国の希望を齎す「希望の共同体」でしょう。この小さなジェスチャーの教育は、「神の国の平和と正義」を実践し、また神学を公共化する試

みで無味乾燥な功利主義的計算より、真に自由で代替的な空間つまり「神の国の先取り」を味わう美徳の共同体を形成して、「小さなジェスチャー」ですが「分与」のイメージでパンと葡萄酒により「神の贈与」を語り、さらに人々の間に「相互贈与」の連帯を生み出します。そのようなソフト・パワーを二十一世紀は「地球的連帯」として必要としています。「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ25:40)とイメージして小さき者の福祉にもキリストの連帯が起り、社会の中心と周辺の二元論も克服されます。人為的の二元論を克服する連帯は、宗教センターやボランティアセンターあるいは「SHANTI SHANTI」などのサークルにも現れるでしょう。ここにただの寛容をこえたキリストの和解の力による「ホスピタリティ」が生じます。これが、「リヴァリアサン」の克服です。この点で私は、ハワーワスの神学的政治学が啓蒙主義的限界をこえた「実践的エネルギー源」だと判断します。このようなサーバント・リーダーシップを発揮する「教育共同体」のイメージアッ

る」儀式です。1972年2月13日、南米のエルサルバドルでルテリオリオ・グランデ(司祭)が村のミサ聖餐で「主なる神は、私たちがすべてに境界線なしに物質世界をお与えになった」と説教し、さらに「……キリストはその最高の犠牲を捧げる前夜に広い食卓を開かれた。これを偉大な贖いの記憶だと言われた。それは、全ての人が立場や地位によらず認め合う仲間となる共有の食卓で妨害と偏見が全て取り除かれ、憎しみそのものが克服される」と力強く宣言しました。ところが、それが当時の権力者の怒りに触れ、一ヶ月もしないうちに政府の小隊に打ち殺されてしまいました。「オスカー・ロメロ大司教は、その管区の日曜の唯一